

都心キャンパスに通う大学生の地震防災に対する認識と行動に関する研究 —その2 地震・防災に関する意識と体験に注目した分析—

准会員 ○ 吉村 敦子*1
正会員 石川 孝重*2
正会員 伊村 則子*3

地震防災 都市型 防災行動
防災意識 大学生 災害履歴

§ 1 はじめに

前報に続き、大学生がどの程度自ら判断して防災対応できるのか、特に大学との関わりを的を絞り、災害対応行動や防災意識についてアンケートから現状を明らかにした。本報では地震・防災に対する意識、防災に関する体験、大学の環境について報告する。

§ 2 地震・防災に対する意識

入学時に全員配布される冊子¹⁾に、地震の初期対応や避難場所、警戒宣言時の対応について掲載があることを知っている学生は、全体のわずか4%(n=325)しかいなかった。大学から学生に向けた防災に関する唯一の広報であるが、有効な情報手段となっていない現状が明らかとなった。この傾向は学部別、学年別ともに差はなかった。

次に地震防災の関心の有無とそのきっかけを聞いたが、冊子の情報を知らないからといって興味がないわけではなく、全体の62%の学生が関心があると回答した。そのきっかけは、図1のように「阪神・淡路大震災」をあげた人が多く、ついで「テレビを見て」「未来の地震の可能性」「授業から」などをあげている。学部別では、図2のように住居学科の学生が78%と最も関心が高く、関心をもったきっかけの2番目に学習をあげているのが特徴である。

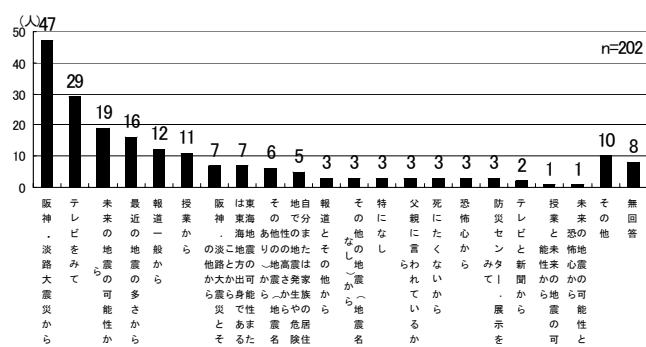


図1 地震防災に関心をもったきっかけ

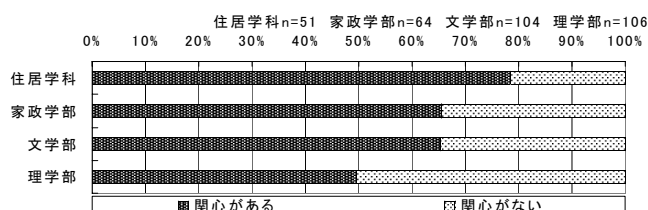


図2 学部(学科)別にみた地震防災に対する関心

次に、大地震により自分が被害を受ける危機感

の67%があると回答した。なかでも住居学科の学生が抱く危機感が高く80%に上った。

また、大学内で地震に遭遇したら、帰宅経路や家族との連絡方法について家族や友人と話をしたことがあるかをたずねたところ、家族や友人いずれとも話をしたことがない学生は全体の42%に上った。学年別では、図3のように約65%の4年生は少なくともいづれかと話をしている。

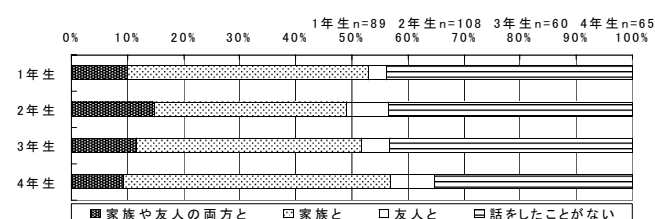


図3 学年別にみた家族や友人との話合いの有無

§ 3 防災に関する体験

3.1 災害体験 図4のように体験者は6%であり、内容は地震(北海道南西沖地震や阪神・淡路大震災、鳥取県西部地震など)が一番多く、JOC臨界事故などもあげられた。

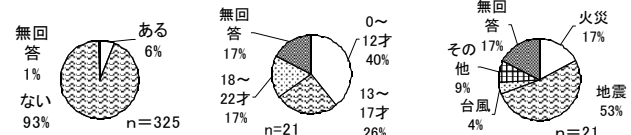


図4 災害体験の有無(左図)・体験した年齢(中図)・体験した災害種別(右図)

地震災害体験者から体験談を聞いたことがあるかについては、「聞いたことがある」38%であり、うち70%(全体では27%)が阪神・淡路大震災の体験談と答えている。誰から聞いたかについては、「友人から」が一番多く、次いで「祖父母から」であった。図5に結果を示す。

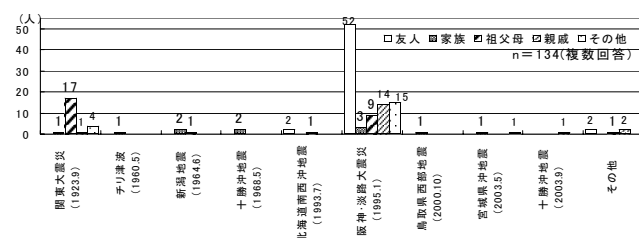


図5 地震災害体験談の聴講

3.2 防災教育 大学で地震に関する講義を受けたことが「ある」人は全体の22%であった。学部別にみると、住居学科では約9割が講義を受けたことがあるが、他学部では約9割が講義を受けたことがないという結果が特徴的で

